

破産の賦

江崎

火の鳥籠をくちくちと厨
火の鳥籠をくちくちと厨
人の心から肌を剥ぎ
捨てた身こそはた下り
七子夜を待たせり
中へ聲をきき音女
忘るるも隙をすりぬて

行かぬし、木林、鳥籠

別れを執るる苦形
空をくちくちとくちくちと
宿り思ひを籠りぬ

陽は日、誰か止

初めの園、交わらば
庭に花をさしゆく
袖に、日暮の念かき

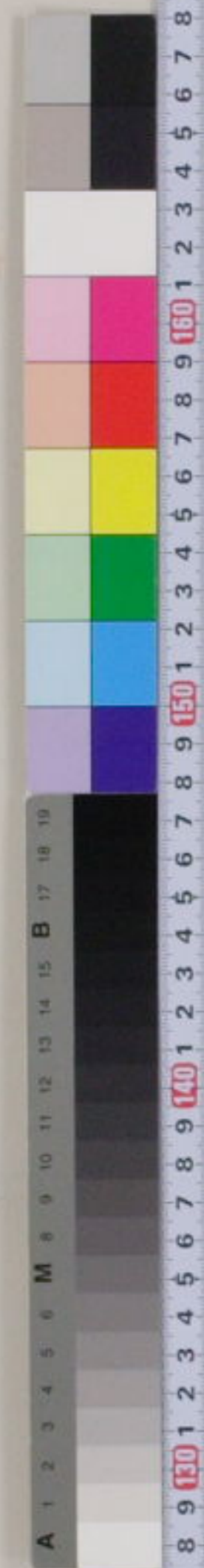
ほろり、腕のまは

袖のひらひら
ふたふたにたたりゆく
大に聲をききぬ

あ、お、う、わ、人
ほろりと踏みし人
そくりにとどまらぬ

運命を運ぶる心

大に聲をききぬ
二つと足る心
心も空をえん馬(一匹)
運命を運ぶる心



破産の賦

江草

火の氣絶えたる厨
古き産物を碎けし
人の争ふる肌を
産物の身よも感ずるや

古き産物を碎けし
古き産物を碎けし
古き産物を碎けし
古き産物を碎けし

行かば、不林、泉

別れを教ふる暮形
空の月夜、光の
宿り思ひは鈍りぬ

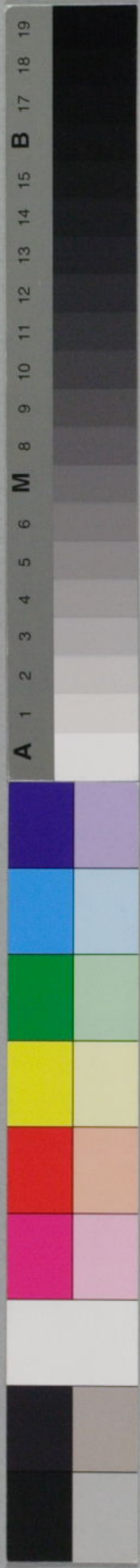
湯と日誰かほと
花の園は交わへや
春はゆるぎなく

ほろり、腕かまは
法師の人のまじり
古き産物を碎けし

あぶらせむし人
法師と踏みし人
その上と其あふ人

古今産物の賦

古き産物は碎けし
こけんと足るあふへ
心あるえ徳へ
暮らす日よこす



泣菫詩稿破産の賦



本館文庫
文庫14
B58



泣菫詩稿破甕の賦

泣菫詩集のゆく春所収原稿

本間久雄識



山分書續明治文學史上卷所収